

---

# 魔王はここに

藍猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王はここに

### 【Zマーク】

Z6573Y

### 【作者名】

藍猫

### 【あらすじ】

死んで、気付いたら魔王になつてました。

- ・・・なんででしょう？
- 「そういう運命なんですね！」
- 「誰ですか！？」

口リ魔王が生きていく話です。

ふるわーぐです。（前書き）

書きたいと思っていた魔王＆最強系です。

『風魔』に読んで下さご。

ふるわーぐです。

私は死んだ。

何もない空間の中で私は唐突に理解する。

・・・あゝあ つまんない

やつと人生の楽しみ方つてやつが分り始めたのに・・・

ま、私なりの・・・だけどね

・・・暇・・・

・・・つて・・・ん?

あれは・・・だーくほーるか?

え・・・ちよ・・・吸い込まれる！？

い・・・やああああああああああああ！－！－？

私は死んで、変な空間を漂つて、だーくほーるに吸い込まれた。

私はこの空間で、あのだーくほーるにのまれ、別の世界に転生する そのための”私”であり、別にこれは神様のミスだつたりはない。だからといって嫌われているわけじゃない。ただそういう”運命”だつたというだけ。

ま、私は実際そんなことは知らないのだけど。

ମୁଦ୍ରଣ

私は今、

だーくほーるの申じいる。

• • • אָלַמְתָּנָה יְהוָה • • ?



ふるわーぐです。（後書き）

あつきたりな内容で「めんなさい・・・

# 1話 ひじょひじょや。 (前書き)

話作るのにはなかなか慣れれないです・・・。  
ハア・・・

## 1話 ひじょひじょです。

・・・リリはビー?

視界が開けたら森でした。

普通の森よりも、なんていうか・・・暗い?感じの森。

にしても動きつい・・・

私はふと自分の体を見る。

「・・・は?」

なんかちつさい・・・

手も腕も脚も・・・まさか・・・

子供になつてる・・・?

といつかそもそも私は死んだんじゃなかつたつけ?

・・・私は転生した??

…………よし。よく分かんないけど理解した。

私は唯一の自慢である並外れた適応力で今の現状に適応する。

んじゃあ今の姿にも適応しますか・・・

トテテテ と近くの湖へ駆け寄り、覗き込む。

「・・・び・・・美少女・・・」

映つっていたのはまさしく美少女だった。質素な黒いワンピースを着てあり、見た目は6~7ぐらいの小さな少女。それが自分とわかつていても、しばし魅入ってしまうほどの美貌だった。

「・・・なんか犯罪な気がする・・・」

「の見た目で中身が18歳っていうのが。

ガサツ

「・・・誰?」

突然の草の動きに対し私は冷静に聞く。何かがいるっていうのは気付いていたから大して驚くことはなかった。

「ほう・・・。なかなか鋭いようだな。子どもとはいえ魔族ってことか。」

さつきまで「こそこそ」としていた態度とは打って変わって、堂々と、意味ありげにニタニタとした男が出てきた。厳つい風貌で、背中には大きな両手剣を背負っている。ニタニタとした目に私は無意識にゾクッとする。

「・・・魔族？」

「あ？ その黒い髪と瞳は魔族の証だらうが」

湖は少し濁っていたから色まではわからなかつた・・・。

「・・・それで、なんの用？」

「・・・何つて、決まつてんだろ？」

男の目つきが怪しく光る。

森の中に、

なんか嫌な予感がします・・・

・・・じりじょつ・・・?

## 1話 ひじょひじょや。 (後書き)

・・・あ

名前、まだ一度もでてませんね・・・

次ぐらいでだすと思います

## 2話　ひやつあです。（前書き）

「どうしよう」が最後にくるよつて  
なんだかんだで頑張っています。

## 2話 「わざわざです。」

「道案内してくれ」

「……………は？」

先ほどまでの二二タ二タ笑いが消え、真剣な顔で男が言ひ。まさか、これほど予想外なことを言われるとは思わなかつた私は、10秒ほど口を開け、啞然としてしまつた。

「いや、だから道案内を……な？」

「…………いやいやいや…………何でです？」

「迷つたからに決まつてんだろ？他に理由があるか？」

「…………ないですね…………はい」

緊張していたことが恥ずかしい……私は脱力し、溜息をつく。そして、目線を男に戻し改めて見て、気付く。男からにじみ出る黒いもやい。またにやりとした表情になつてゐる男は気付いていないようだ。

・・・」のもやもやとした森の影響？・・・大丈夫だよね？

「どうかしたか？嬢ちゃん？」

男は怪訝そうに聞く。私は思いつきり不安そうな顔をしていた様だ。そのことに気付き、すぐに初対面用の作り笑顔を浮かべる。

「いえ・・・特に何もありません。・・・所で、何故こんな所で迷っているんです？」

「」がどこかも分かつていらない私が言えることじゃないな・・・。

「・・・ちょっと人を探してて森に入ったんだが気付いたら迷つてたんだ。」

「うそですね？」

「！？」

男の顔が驚愕に満ちる。

人を探して森に入った？こんな危険そうな森に1人で？・・・ありえない。

道案内？こんな子どもに？馬鹿じゃないの？

仮にこの森が危険じゃないとしても、その大きな剣は何のために？

おかしいことが多すぎる。それに道案内を頼むなら、何故隠れる必要がある？

・・・今なら分かる。あの男からにじみ出る黒いもやは嘘を吐いた証だと。あの男が口を開くたびに黒いもやは出ていた。あの男は嘘ばっかりだ。じつこいつやつは嫌いだ・・・。」の・・・

「うそつきっー。」

ザアアアアアア・・・

黒ずんだ植物が、私を中心に枯れていった。

今だ森の中に、

何故か怒りを表わした私の周りの植物が枯れたいきます。

・・・どうしよう・・?



## 2話　ひやつせですか。（後書き）

・・・「めでなさい・・・

結婚お前出せませんでした・・・

しかもなかなか話が進まないです・・・

3話 ひょいねんだよ。（短冊）

正直いつこまだな前考へてないんですよ。  
あれこへ「ビーナス」ですね。

### 3話 ひじょうねんです。

「ハモツキハ…」

ザアアアアアアア

私の咆哮と共に弧を描きながら草が枯れる。

ただ、枯れたのは地面に敷き詰められた草だけで、大きな植物や木は私の咆哮に合わせて揺れるだけだった。足元の草が枯れたことに気付いた男は、力なくへたれこむ。

「ば・・・化物・・・ひ・・・ひいいいい！…」

恐怖に彩られた声野太い声が当たりにこだます。

そんな男に私は無意識に手をかざす。そして力を込めて言葉を発する。

「・・・死んで？」

瞬間、私の感情と共に鳴っていた周りの木々が伸び、男を襲う。

「ガガ・・・・ガ・・・・あああああああーーー！」

ブシユ

その音と共に男の声が途絶える。

木々が戻つてていく。そこには血一滴もなく、代わりに枯れたはずの草が広がっていた。男を養分にしたのだろう。草はどす黒い光を放つている。

「・・・なに? 今の・・・」

私は今起こつたことに呆然とする。あの男を殺したのは、多分私が操つたのをきつと私なんだろ? でもどうしてこんな力がある?

・・・もしかして私、転生したのは異世界?

・・・ならわしきあの男が言つていた魔族つていうのが私・・・?

「うんややこしい・・・ん?」

何かが近付いていたことに気付き、考へることを中断する。

ぐんぐんとすゞ速さで気配が近付いてくる。

・・・これは3人?いや、2人か・・・?・・・・・・来る!

ザザザザアアアアアアア

ザンシツ！

森の木々から出てきて影は私の目の前に姿を現す。ビュオオオ  
と風が吹き抜ける。

出てきたのは2人。執事服の少年とメイド服のお姉さん。2人と  
も漆黒の髪と瞳で神秘的な顔立ちをしており、その綺麗な瞳で私を  
見ている。

うわ・・・美形だあ・・・

座り込んだまま呆けていると、綺麗、というより可愛いらしい微笑みを浮かべた執事服の少年（10～12歳？）が手を差し出す。

「ଓଡ଼ିଆରୁକ୍ଷମାନ」

・・・ やばい・・・ すひへじへきたれい・・・

きれいな少年に田を奪われてしましました・・・

・・・どうしよう・・・？



### 3話 ひじょうな話。（後書き）

主要人物はどうしても美形にしてしまつ……

願望とかじやないですよ？

・・・幾分・・・

## 4話 まおひですか？（前書き）

なかなか進まない

やつと魔王についての話になってしまった！

4話 まねいですか？

「あ・・・ありがとう・・・」「

そういうて私は少年の手をとる。

少年は顔を赤らめ嬉しそうに私を起こす。

「え……と……アリエゼーラなの?」

さつきの男と違つて心地良い雰囲気の2人は「ああ・・・」と弦  
き、どう説明しようか迷つてゐるようだ。少しして少年のほうが言  
ひ。

「とりあえず、我が城へ参りましょう」

「城？」

「はい。我が城・・・魔王城につつ！」

「魔王様の御付の魔族です」

・・・魔王城・・・魔王様・・・魔族・・・

「こじが元いた世界じゃない・・・つまり異世界だと認めざるえな  
い言葉だ・・・」

死んで、吸い込まれて、異世界に転生した・・・と。なんでこんな事になつたんだろう・・・

「・・・気になる事はたくさんあるけど、今はまあいいか。・・・  
うん。その魔王城に私を連れて行つて。後、この世界にのことを教  
えてほしいんだけど・・・いいかな?」

前半は独り言。後半は2人に向けての言葉。

2人は快く引き受けてくれた。ちょっと衝撃的な言葉で。

「「もちろんです!!魔王様の言つとおり!」」

「わっ。僕におつかまつ下せ!」

「へ?あ、ちょー?」

つかまつてつて言いつからつかまつたにのに、何故お姫様だっこするの…?しかもけつこう嬉しそうですね!?

「・・・つて、魔王って私なの!?」

「はい!説明は後でしますが・・・確かにあなたが魔王様です!僕だけじゃなく、ほかの魔族の人達もあなたの存在に気付いてると思いますよ。きっと

「・・・何でそう思うの?」

「なんで・・・と言いますと・・・存在が、ですかね?」

「・・・答えになつてない・・・」

「と、とにかく存在が魔王様なんです!あ、後、その膨大な魔力とか魅力とかですね」

「魔力?は何となく分かる・・・。けど魅力って?どう見ても私6歳ぐらいだと思うんだけど・・・」

え・・・何?ここの人達つてそつち系なの?うわ~、引くわ・・・

「まあその話は後でしてくれるんだよね?そういうことならはやく行こ!」

「「はい!」」

少年の腕の中に、

あ・・・まだ血口紹介してない・・・

• • ڦاڻ ڦاڻ ڦاڻ • • ?

#### 4話　おひでですか？（後書き）

結局名前はまだ出てないです。

名前が出てから人物像について説明しようと思っています。

## 5話 へんないすです。（前書き）

実はテスト中でした（笑）

更新は日々遅れしていくと思いつので

あしからず・・・

## 5話 へんないすです。

「見えてきました」

少年・・・ユウの声とともに長かつた森を抜ける。本名は『ユウル=ミージュル』だと来る途中で聞いた。ユウとおよび下さいと言ふから ユウ だ。もう一人のメイドのおねえさんは『メリーネル=リオネラ』で、メリー だ。

ゴウ

耳元で風の切れる音が聞こえる。

少し先には山のように聳え立ついかにも魔王城という風貌の城があつた。この辺りは晴れることがないとかで、時折雷の光で照らされる。門の前には二つい鎧の者が二人（そもそも人なのか？）立っている。

門の前に着くと、鎧が ガシャ と音をたてて跪く。（あ、中身いたんだ）

「よくお越しになられた・・・魔王様」

少し涙声なのにギヨッとする。

「ずっと待つてたんですよ。みんな」

ユウが耳元で囁く。

「・・・そ、うなんだ・・・私はまだ子どもだから気は使わなくていいよ。ところで、あなた達の名前は?」

「お心遣い感謝します。私は『オルス』でござります。」

「私は『ルスオ』でござります。」

「・・・オルスにルスオ?似てるんだね・・・。間違えそう・・・。ユウとメリーミたいに姓はないんだ?」

「はい。我々のような身分には姓は存在しません。後、我々二人は間違われても結構です。双子ですので。」

「だめだよ。双子だからってそんなこと言つちやだめ!名前は大切にしないと!」

私の突然の怒りにオルスとルスオは困惑して啞然とする。だが少しして、弱弱しくもハツキリとした声で2人は私に告げる。

「「ありがとうございます!」」

私はそつと微笑み、ユウに中へ入ることを急かす。

その時の私は、ユウの言つていた魅惑の効果があの2人に効いて

いて動けなかつたということは知らない。密かにユウとメリーが頬を赤く染めていたことも・・・。ただ私は城に入つて、でかいな」としか思つていなかつたんだから。

さして豪華でもない大広間の奥には階段があり、その上にぽつんと黒いすが鎮座していた。

え・・・ここに座るの?なんか本氣で嫌なんですが・・・。

そんな嫌な予感は的中し、私はそのいすに降ろされる。座つた途端に何かに覆われる感じがした。別に不快つてわけじゃないからほつておこ・・・

『おお〜〜。あんたが次のご主人様か〜。まあよろしく頼むぜ〜!』

頭の中に声が響いてくる。

・・・多分このいすなんだろつけど・・・うん!無視!

『それはないぜ〜。ご主人様〜〜』

悲痛つぽい声が木靈した。

変ないすにて、

なんだかめんどくせむつです。

• • • נְעָמֵן • • ?

## 5話 へんないすです。（後書き）

少しずつ書く量を増やしてこねます・・・

後、これは自分の思ひままにやつてるので、

話がおかしかつたりあると思こます。

・・・暖かい日で見守つてくれると嬉しいです・・・//

## 6話 なまえです。（前書き）

26・27日はボーアスカウトでキャンプでした。

・・・寒かったので、風邪気味です・・・。

地味に書く量が増えていきますので・・・。

## 6話 なまえです。

「ゴウ。」のこす・・・なんなの?」

肘掛けをトントンと叩きながらこすを示す。

「? そのいすがどうかされたのですか?」

あの頭に響いてきた声は私にしか聞こえていなかつたよ!だ。多分このいすは何かが特別なのだろう。

「・・・頭の中に話しかけてきた・・・?」

つまく言葉にできず疑問系になつてしまつた。・・・いつものように頭がまわらない・・・。見た目だけじゃなく中身まで子どもになつたという感じ・・・?

「・・・声・・・。そのこす グリムゾンの声ですか?」

「そのグリムゾン・・・? かは分かんないけど、多分。」

「グリムゾンの声は魔王様にしか聞こえないと云われています。あなたが魔王であることがハツキリしましたね!」

私は ふうん とグリムゾンを見まわす。

・・・魔王専用つてことか・・・けつこうう凄いんだ・・・

『けつこうじゅねー・めひひくひひひ凄いんだ――――』

・・・心読まないで・・・?

「といひで魔王様」

「なあに? ュウ?」

「もう少ししたら、ここにこの国のトップが集まります。まあ魔王様のお披露目みたいなものなんですが・・・嫌な態度をとるやつ・・・方がいるかもしませんが、よろしくお願ひします。」

・・・ユウさん・・・今一瞬素がでかけてたよ・・・?

「お披露目つて・・・情報はやいんだね・・・」

『ほそつと咳く。

・・・そういうえば、他の魔族の人達も気付いてる みたいなことを言つてたつけ? 直感つてやつか・・・?

『魔族つてのは仲間には敏感なんだよ。人間とは違つてな

・・・ん? 予想はしてたけど、やつぱり人間つているんだ・・・。といつより、魔族つて仲間思いつてことか?・・・意外!。

少ししてからユウが話を続ける。

「それで……名前のことなんですが……」

ふうん？名前がどうし……あ……

私、まだ名乗ってないじゃん！？人に聞くだけ聞いたって……

「！」、「じめん！私、まだ名乗って……」

「それでいいんです！」

・・・つまり名前なんか知りたくない？・・・心にひびが・・・

。

「そ、そんな顔しないで下さー！そういうことじゃないんです！魔王様にとつて真名まなとはとても大切ななんです！だからそんな軽々しくお教えしてはダメなんです・・・」

少し泣きそうな顔をした私にユウは慌てて補足する。その様子にメリーや反応し、ユウを軽く睨みながら「・・・ばか」と呟いたのでユウは俯いてしまった。そしてメリーやユウの後を引き継ぎ、説明の続きを言う。

「魔王様は代々転生者だと聞きます。ですので魔王様の真名まなは前世と現在の2つを御持ちということになりますね。」

「・・・2つ？」

「はー。あるはずです。もつらとつのねが・・・。」

「コウとメリーには教えてもらーいの?」

「え・・・あ、はー。あなた様が信用できると信じて下さるなり。  
・・￥￥￥」

今までキリシとしていた顔を綻ばせたメリーの微笑みはとても  
綺麗だったと言ひおひづれに。

「・・・ん~・・・」この世界での名前・・・

フツと頭の中に浮かんだコトバがあった。

これが私の名・・・?

「フンノリネル＝コレイシア」

王の広間にて、

真名まなを知ると魔力が溢れ出てきました。

・・・どうしよう・・・?



## 6話 なまえです。（後書き）

なにか悪いといひなじは感想でお伝えいただくと

嬉しいです・・・

頑張つてなおしますのでー！

今回はコウ視点です。 。 。

そろそろ違う人目線でこうとおもっていたので・・・

## 7話『エーラ＝ミージャル』

「フェノリネル＝ユレイシア様……」

魔王様が……フェノリネル様が名をお教えくださいました。

嬉しいです……。ぼくを親しい者として受け入れてくださいました  
ことが……。

そんな歓喜に震えているとフェノリネル様の辛そうな声が聞こえ  
てきた。

「あ……熱い……よお……」

「……どうなさいまし……ぐつ……」

異変を感じ、すぐに駆け寄るつと見る、が……

「近づけない？……つ……これは魔力！？」

まさか真名まなを知ったことで奥に眠っていた魔力が暴走した！？しかもぼくやメリーガ近づけないほど魔力とは……

パリパリ

電気のような痛みが全身を打つ。

「フェノ……魔王様！これは魔力です。落ち着いて抑えてください。」

「……これが魔力……ん~…」

魔力が暴走すると本人にも辛いもの。なのにフェノリネル様は眉を顰めつつも凜とした凜々しい顔で冷静に対処している。

その光景がどうしても美しく見えてしまう。

見惚れているのはぼくだけじゃなく、メリーも同じようだ。

少しして、魔力を肌で感じないほどに凝縮されていき、フェノリネル様へと吸収されていく。

「……うん。感じは掴めた。」

フェノリネル様の声が辺りに木霊す。

「だ……大丈夫ですか？ フエ……魔王様？」

ぼくより一足先に現実に戻ったメリーはフェノリネル様に聞く。

「うん！ 全然平気。あ、後名前で呼んでいいんだよ？ なんか魔王様って呼ばれるのなれてなくてさ……。フェノリネルは長いから『フェノ』がいいかな。」

さつきまでの重い空気が台無しのよう、明るく、無邪気な声で

フェノリネル様が言つ。

無邪気な声と無邪気な笑顔とは裏腹に、微かに向けられる殺氣。無駄に時間は取りたくないのだろう。

なら、わざわざ時間を取りれることはないのがぼくたちのやるべきことだ。

「「わかりました。ぼく／わたし の主、フェノ様」」

その言葉は誓いの言葉。

すべてをささげ、尽くすといつ示唆。

それが魔王様に仕えるために生まれ、そしてその魔王様に惚れたぼくの精一杯の誠意。

現れるかも分からない魔王様の御付に選ばれたとき なんでもぼくが・・・なんて思っていたことが、優秀な家系だからと過度に期待され何度も死にそうになつたことが、今のぼくの忠誠の前では霞んで見える。

「ふふ・・・ありがとう

フェノ様が綺麗な漆黒の目を細め、笑う。今までに見せたことのないような笑顔・・・ぼくはこの無垢な笑顔のために・・・ぼく・・・

・『ゴウル＝ミージュル』はすべてをさらげる・・・

「あなたの為に・・・」

## 『おうれ=おーじんれ』(後編)

ところが、この問題に対する態度を主にしました。・・・。

とにかく 忠誠を誓つた ところのことを

分かつていただけると十分デス

8話 「わざとや。」(繪書)

たまに間違つてこな『なぞ』を

直しておる。・・・

誤字が多くて、めんねさこ。・・・

「私はあなたに決闘を申し込む……。」

「え～・・・いや～・・・」

私の不満そうな声に決闘を申し込んだ男・・・カイル＝バーサド（15歳くらい）が奮闘する。

まわりにはそれを面白がって見ている者、それを利用し私を見定める者、私に許しを乞おうとあたふたする者、私が男を心配する者が、わらわらとうるつしている。

・・・なんだとこんなこと・・・

それは少し遡って約1時間前、私がお披露目の準備をしている時のこと。早めに到着したと思われる貴族の一人息子が私が魔王だと知らずに話しかけてきたことから話は始まる・・・。

廊下の向かいからやってきたこれまた美少年。瞳は金色だが、髪

は私と回じよつに漆黒だ。

・・・やっぱ魔族だよね〜?

ふと目が合い、男が話しかけてきた。・・・」これが始まり。

「おい。お前」

「ふえ? 私ですか?」

「お前意外に誰がいる?」」のちび」

かつちーん

「・・・あなたはどなたですか・・・?」

「俺を知らないとは・・・ビ」の餓鬼だ?ちび」

ふち

「あのう・・・やつから何なんですか? 一体・・・」

「今日はとても大切な式典の日だ。餓鬼はとつとと家に帰りな。  
ハン」

ぶちつ

「あーーもーーーーー。少しは人の話を聞いてはどうですかつ?  
それともあなたはあれですか、人語も理解できないくらいばかなク  
ズ虫ですか? あ・・・それだと『ぐず』と『虫』に失礼ですね・・・

。　・・・少しほ反論ぐらこしてせどひですか？残念坊ちやま？」

久しぶりに溜まつていていらいらを発散したからか、口調が大分荒くなつてしまつた・・・。

綺麗な、誰もが美しいと思つよつな純粹無垢な笑顔で吐いた暴言は、男にはすぐに理解することはできなかつたようだ。しばし目を瞬かせ少しづつ顔が赤くなつていく。

・・・理解おやへ・・・。

「へへつーなんつだとこのちびーーー。」

「つーまた　ちび　と書いましたねーーーこのくそ虫ーーー。」

「だれがくそ無視だつーーー。」

「あれーーまさかの字が違ひつーーやつぱりばかなんですねーーー？」

そこからは完全に売つ言葉に貰い言葉・・・

1時間も2人でギャーギャーとお互いを罵倒し合つた。

気付けば式典に来た人達に囲まれ、

「私はあなたに決闘を申し込むーーー。」

「えーーーーーいやーーーー。」

といつ展開になっていた。

完全に自業自得なのだけど・・・。

魔王城の廊下にて、

めんどくさいひです。

• • • எடுத்து • • ?

8話　ついでか。 (後書き)

展開的には次は決闘になると思います。

- ・・・戦闘シーンは苦手ですが頑張りまーす！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6573y/>

---

魔王はここに

2011年11月29日22時46分発行